

# 宮崎館遺跡等範囲確認調査概報

—第一 2 次—

1988. 3

諫早市教育委員会

## 発刊のことば

「泉水海」、美しい響きをもつ諫早湾の別称。

たゆとう波のきらめき、干潟に遊ぶ小動物のしださ、芦原をかけ抜ける風の音、溝筋に横たわる漁船。

干潟のもつ豊かな風情は、私たちに安らぎと親しみを感じさせてくれます。

悠久の歴史の中で、干潟は創られ、多くの自然の恵みを我々に与えてきました。

この諫早湾の湾奥部3,550haを潮汐堤防で締切り、その中を内部堤防で囲み、1,650haの干拓地を造成する今世紀最後の大事業が「諫早湾防災総合干拓事業」です。高効率・高生産性農業の創造と、低平地に対する防災対策の確立を目指し、これから十有余年の歳月をかけて実施に移されようとしています。

また、昭和63年度には干拓をテーマとして干拓資料館の開設が準備されており、多くの皆様に諫早の原像を体得していただきたいと存じます。

我々の先達は、自然との調和に意を配して干拓を行い、豊かな耕地を創り出してきました。しかし、その営みがいつ頃から始まり、どのような方法でなされてきたのか、十分に判明しているとは言えません。

そこで、先年から本事業の計画を策定し、実施してきたところであります。干拓史の解明という観点からは、やっとその端緒に立ったというところであります。

歴史の経糸と縦糸を解きほぐすことによって、諫早を形作ってきた潜在的な力、原像が自づと浮び上がってくると信じております。

最後になりましたが、この事業の実施に際しましては、文化庁、県教育委員会をはじめとして、地元町内会、地権者の皆様及び関係機関には多大なるご援助とご指導を賜わりました。また、嚴寒の中、調査に従事して頂きました皆様に対し、深甚なる謝意を衷心より表したいと存じます。

本書が文化財保護の一助となり、諫早の歴史を解明する先鞭ともなれば、望外の喜びとするところであります。

昭和63年3月31日

諫早市教育長 西原 英麿

## 例　　言

1. 本書は、昭和61年度より実施している「宮崎館遺跡等範囲確認調査」に係る第2年次の調査概報である。
2. 調査実施にあたっては、国・県の補助金を受けて、諫早市教育委員会が実施した。
3. 調査の体制は次のとおりである。

西原英鷹（諫早市教育長）、松尾誠（同次長）、山本正毅（同社会教育課長）

立川勝（同補佐）、宗空子（同參事補）、崎田哲亨（同主任）、松木英俊、木下京子、永尾健二、秀島貞康（同課員）

調査員　久村寅男、橋本幸男、川内知子

調査外業　績方塙八郎、久保スミエ、須崎ミサエ、高島重夫、立川秀之、田淵一實

野沢テルヨ、橋本雪義、東好太郎、真崎保、道辻國昭、道辻正也（五十音順）

4. 調査に際しては、文化庁、県文化課、土地所有者、地元町内会等関係機関から多くのご指導とご援助を賜わった。
5. 地形測量、遺構実測、写真撮影及び本紙掲載の図面等に關しては、久村、橋本、川内、秀島が行った。
6. 本書に使用した高度値は海拔高であり、方位は磁北を示している。
7. 出土遺物等に關しては、諫早市教育委員会が諫早市郷土館において公開・保管している。
8. 本書の執筆は、付編Ⅰを(社)日本アイソトープ協会、付編Ⅱを聯合リノ・サーベイ報告書分を掲載し、他の執筆は秀島が行った。
9. 本書の編集は秀島が行った。

## 本　文　目　次

発刊のことば

### 例　　言

I	遺跡の立地と環境	1
II	調査の概要	5
1.	土層の堆積状況	5
2.	遺物の出土状況と検出遺構	7
3.	出土遺物	11
III	まとめ	14
	付　編	
I	年代測定結果報告	23
II	珪藻分析・花粉分析報告	25

## I 遺跡の立地と環境

宮崎館遺跡等は標高247mを測る金比羅山から派生して北側に延びる丘陵先端部、及びその地先の低平な泥質地に存在する。

この泥質地は有明海の湾奥部の西寄りに位置し、諫早湾或いは泉州海と呼称されている。泥質土は地元では「潟土」、土木工学上は「有明粘土」と呼ばれ、有明海研究グループによれば層厚は最大30mを測り、形成された下限の絶対年代は約9,000年B.P.前後と推定されている。

諫早湾の泥質堆積物である有明粘土層は、鎌田泰彦氏により分類された堆積型に依拠するとⅢ型で、湾奥部に堆積、分布することが指摘されている。これは主として筑後川から供給された微細な粒子が、西流する湾内環流によって西側に運ばれ沈積したものである。

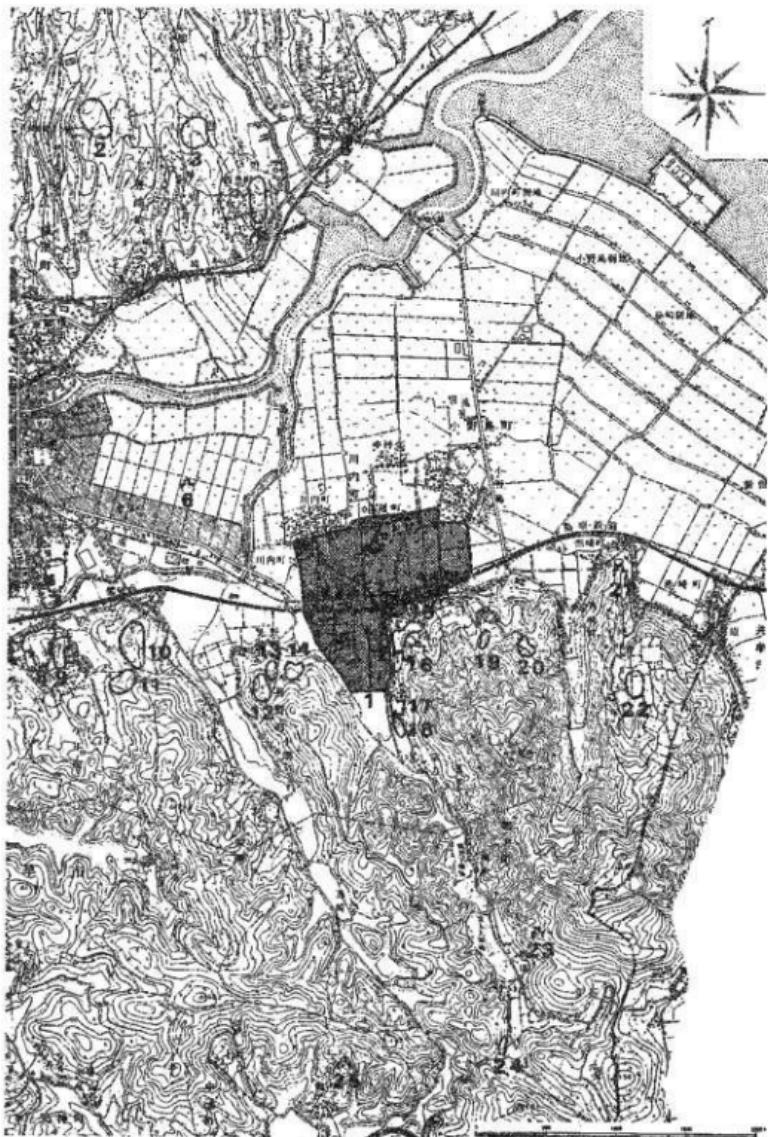
この有明粘土と呼ばれる泥質堆積物の表層部に我々の先人が何時頃、どのような形で果敢に挑み、耕作としたのか。土肥利男氏は標高2.5mを低限とする旧潟原が諫早平野における最も古い開拓地とされ、二ノ坪、三ノ坪、八ヶ坪、五ノ坪、四ノ坪、大坪の坪数詞名が残る条里制地割の存在することを指摘された。この地域は宗方町地先、川内町、小野島町に跨続されており、最も早く千陸したであろうことが推量される。

さて、諫早地方で最初に文献に現われるのは「船越」である。平安時代に編纂された『延喜式』兵部省式に駅の所在を載せている。それによれば基肄十正、切山、佐嘉、高来、篠水、大村、賀瀬、達鹿、登望、杵嶋、塙田、新分、船越、山田、野鳥<sup>モウカ</sup>とあり、『養老駆牧令』により30里に一駅が置かれた。この経路よりすれば、船越駅（市内船越町）から山田駅、野鳥駅を経由し、肥後に渡るルートは、本遺跡の近傍を通っていたであろうことを彷彿させる。

文永8（1271）年11月19日閑東裁許状案によれば、伊佐早庄長野村内浦福地の本主は江大夫助宗、子息江太郎大夫高宗、正治2（1200）年12月4日養子源三郎兼杖納に譲り、承元2（1208）年4月に舍弟源左近将監送に譲り、達は建暦3（1213）閏9月に宗像大宮司氏國に活却した。更に氏國は嘉祥3（1227）年閏3月に舍弟氏經に譲り、氏經は子息宗方



第1図 位置図

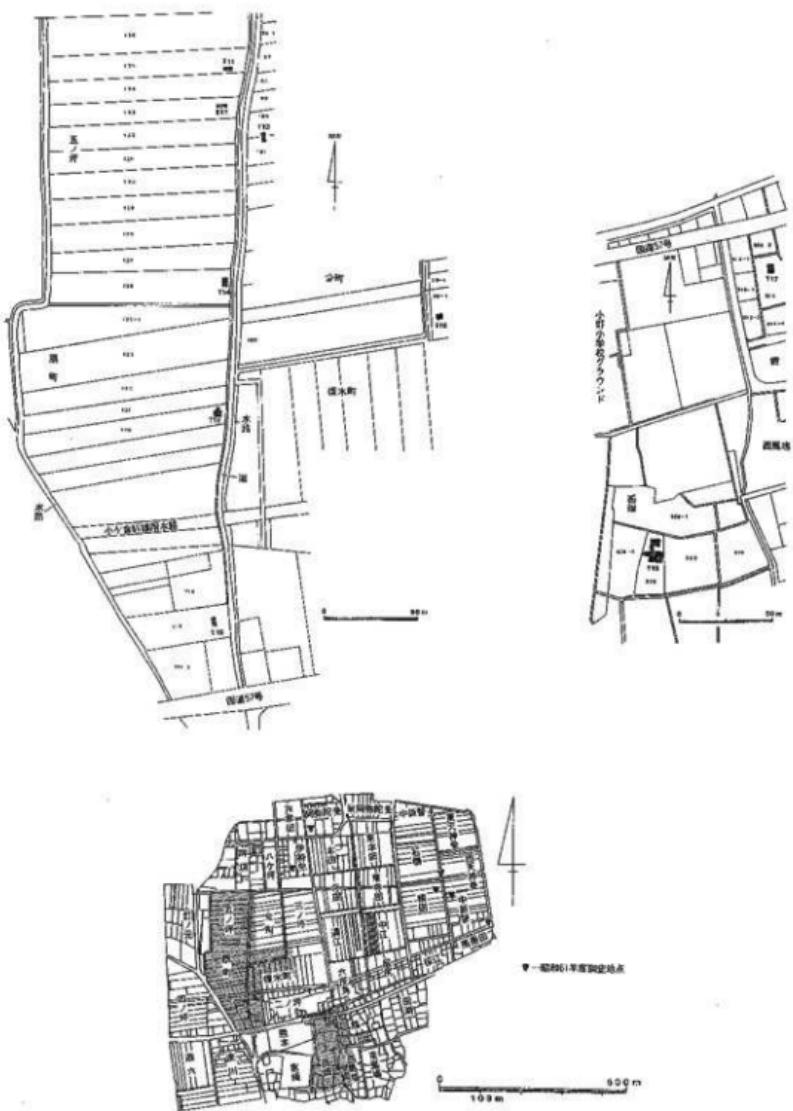


第2図 分布図

六郎氏業と永野小太郎氏郷に分譲したが、相論するところとなり、弘長2(1262)年頃永野村を中分し、東方を氏業、西方を氏郷が領知するところとなった。この中分線と類推されるのは、字「瀬六」、「道井手」の西側水路付近と推定され、鎌倉時代或いは平安期にまで遡るであろうと考えられる。

迷跡名	所在地	立地	出土遺物等	時期
1 東里塗定地	諫早市小野町・川内町 宗方町・長野町	水田部	券生～土師器等	弥生～
2 中山遺跡	諫早市福田町中山	丘陵	輪廓石剝片	
3 正津遺跡	諫早市小豆崎町正津	丘陵	サヌカイト片、土器片	
4 西里塗跡	諫早市西里町	丘陵	绳文土器、弥生土器等	绳文～生
5 長田貝塚	諫早市長田町	台地	券生土器	弥生
6 沖城跡	諫早市仲神町	旧水田中嶺高地	軒丸瓦、土管(瓦質)等	中世
7 諫早農業高校遺跡	諫早市船越町	平野	細形網目	弥生
8 小栗A遺跡	諫早市小川町林ノ辻	丘陵斜面上	券生土器片多數	弥生中期～
9 小栗C遺跡	諫早市小川町	丘陵東面	輪廓石剝片、表棺	弥生中期～
10 十仙平塗跡	諫早市鶴崎町庵ノ山	丘陵上	黒曜石剝片、碎片	
11 潤内谷遺跡	諫早市小川町	丘陵鞍部	黒曜石剝片、碎片、他多量	
12 峰出塗跡	諫早市長野町	丘陵	券生土器、黒曜石剝片・碎片、他多量	弥生中期初頭～
13 尾野大久保塗跡	諫早市長野町	丘陵斜面	黒曜石剝片・碎片	
14 岐田塗跡	諫早市長野町1350附近	丘陵斜面		
15 宮崎塗跡	諫早市宗方町宮崎船 小野小学校裏	丘陵部先端	ナイフ(1片)、石器多數、サヌカイト、黒曜石フレーク多數、各時期の土器片多數	绳文～金
16 小野城跡	諫早市小野町	丘陵		室町後期
17 水の手遺跡	諫早市宗方町水の手	丘陵		
18 太郎丸塗跡	諫早市宗方町太郎丸	平野	券生土器	弥生中期～
19 小野貝塚	諫早市小野町小野場	丘陵先端部	券生土器片 貝の種類はウミニナ、ハイガイ(主体)	弥生
20 内野遺跡	諫早市小野町内野堤	丘陵先端部	券生土器片(中期)、網片、石器	弥生中期～
21 黒崎城跡	諫早市黒崎町	丘陵先端部		中世
22 仁川野A塗跡	諫早市黒崎町仁田野	丘陵斜傾地	石器、绳文土器片、块入石製品	绳文
23 宗方城跡	諫早市宗方町櫛原	丘陵		中世
24 本秀古墳	諫早市長野町木秀	丘陵先端部		古墳後期
25 鶴田塗跡	諫早市鶴田町	丘陵		中世

第1表 地名表



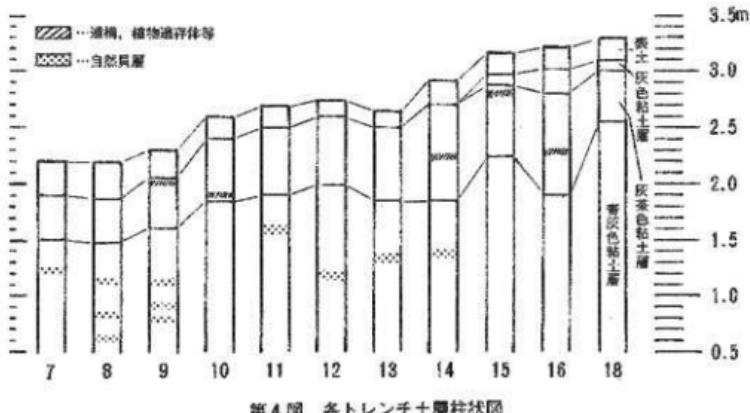
第3図 局辺図及びトレンチ設定図(1/15,000, 1/3,000)

## II 調査の概要

### 1. 土層の堆積状況

#### • T11~16・18 (第4~6図、図版1・2)

土層の堆積及び層順は基本的に同一で、上位から表土、灰色～灰茶色粘土層、青灰色粘土層より成る。灰茶色粘土層は乾燥するとタテに亀裂を生じる。層中には1~3mmの大茶色の鉱物粒子を含み、かなり酸化した傾向を示す。T14においては下位に灰色粘土層が青灰色粘土層との間に介在しており、この層は漸移的なものと推され、上・下面是かなりの凹凸が認められる。青灰色粘土層は還元の度合いの高い層で、上層と同じく層相は細かく均一で、保水性が高い。



第4図 各トレンチ土層柱状図

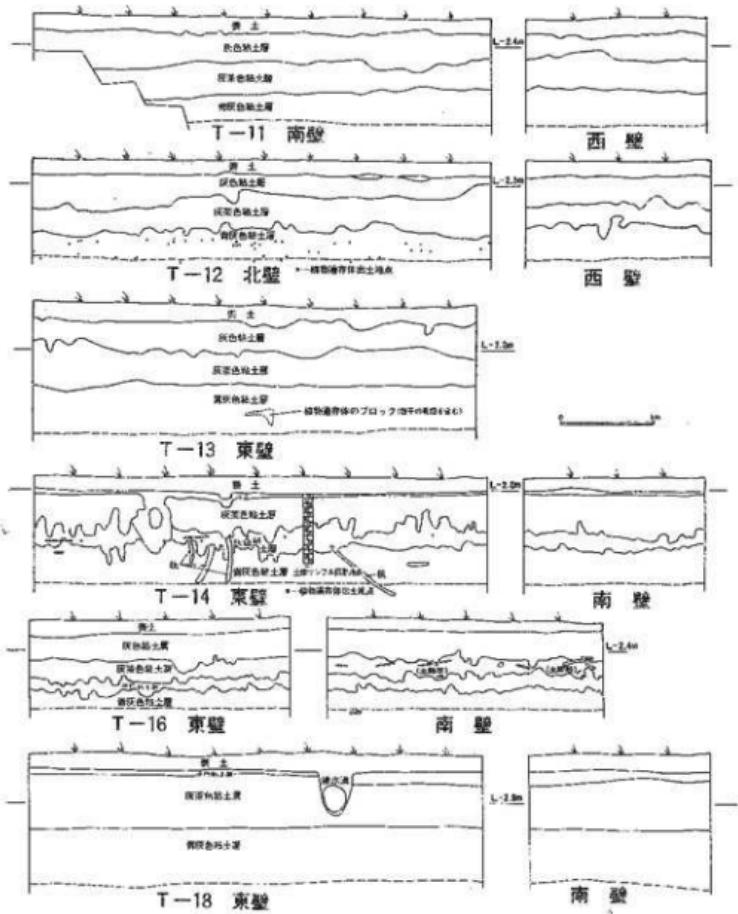
第4図は各トレンチの土層柱状図である。T7からT18までの距離約500m、比高約1.1mを測り、2.2/1,000の勾配である。これは下層の堆積もほぼ同様の傾向を見せており、自然堆積であることを示している。この中で人為的營力により或いは人為的遺物が認められるのは、殆んどが灰茶色粘土層においてである。

#### • T17 (第7図、図版3)

灰色粘土層の上位の層はすべて二次堆積層で明治以降の所産である。

#### • T19 (第8図、図版3)

透構検出面の上層は表土・耕作土であり、層厚約20cm位である。



第5図 トレンチ土層図 (1/60)

## 2. 遺物の出土状況と検出遺構

T12（第5図）北監土層に植物遺存体の出土高度を投影しているが、すべて青灰色粘土層からの検出であり、人為の可能性があるものは皆無である。これらは炭化・腐耗しており溝内環流で運ばれ埋没したものと考えられる。

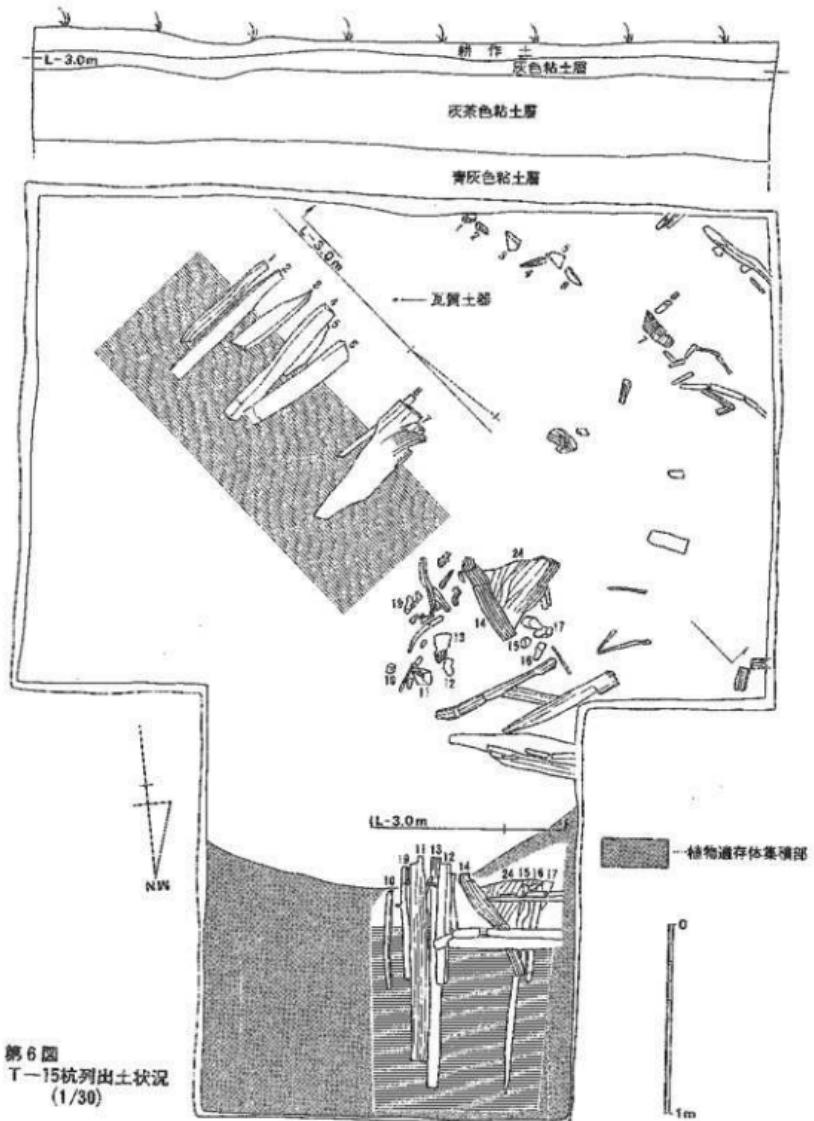
T14（第5図）では灰色粘土層から遺物が検出されている。杭は略々東西位方向で立杭が3本、斜位のものが1本検出された。また、瓦質土器もほぼ同高で1点検出されている。なお同トレンチから花粉・珪藻分析用サンプル（ $5 \times 5 \times 5$  cm）を15点採取した。

T15（第6図）では灰茶色粘土層より打ち込まれた杭列等が検出された。杭列はトレンチ南西隅に位置し、主軸はN-48.5°Wである。杭は70~80cmほどで、スギ材を荒削りして使用している。また、トレンチほぼ中央からはスギ板或いは杭が打ち込まれている。近くには板材が横位で確認されており、いかなる性格をもつ遺構であるか今のところ不明である。なお、これ以北には植物遺存体が集積している。当トレンチのこれら遺構は、南から北に流れる水路の一部と推される。

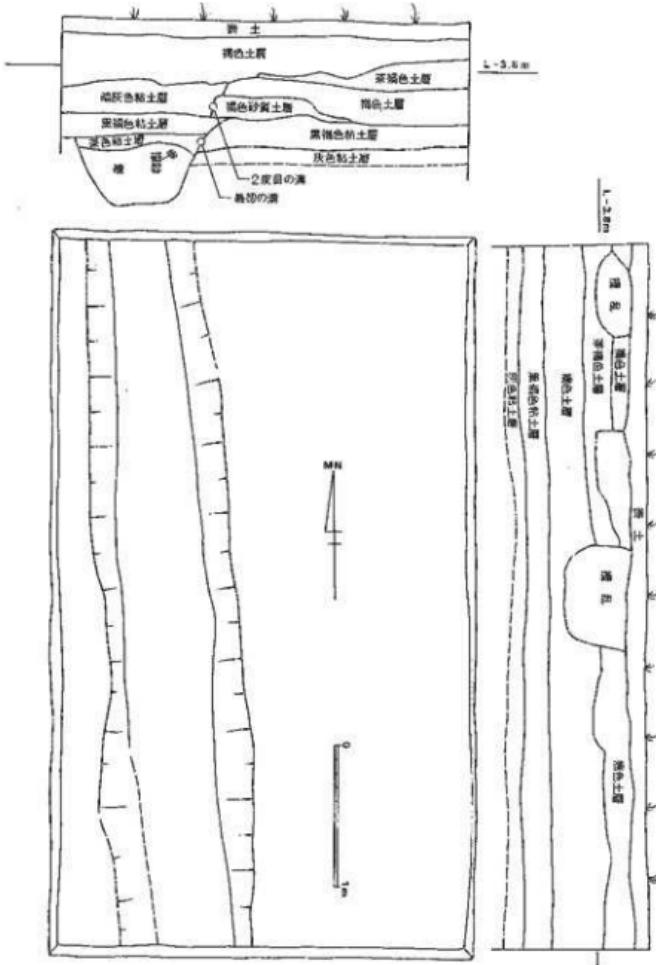
T16（第5図）において灰茶色粘土層より土師器高杯部が検出された。杯部は数片散在し、150cmほど離れた2片が接合した。

T17（第7図）において南北に走る溝が検出された。幅は上端で90~110cm、下端で40~60cm程度の断面梯形を示す。造成面は灰色粘土層上位の黒褐色粘土層で堅密に固められている。溝内には小児の拳大~人頭大の火山性の亞角・亜円礫が間隙なく詰め込まれ、上面は埋土がなされていた。礫間には図版4に示す陶磁器が含まれ、最下位より同図版右上の磁器が出土した。これは塑紙摺りの椀の破片であり、これによって明治初期の所産であることが判明した。また礫間からは江戸中期以降の陶磁器が多出しており、近傍に「鍾」という字名が示すような建物が存在したことを彷彿させる。なお、溝及び堅密面は明治24年に建てられた小野尋常高等小学校に関連する遺構と判断される。

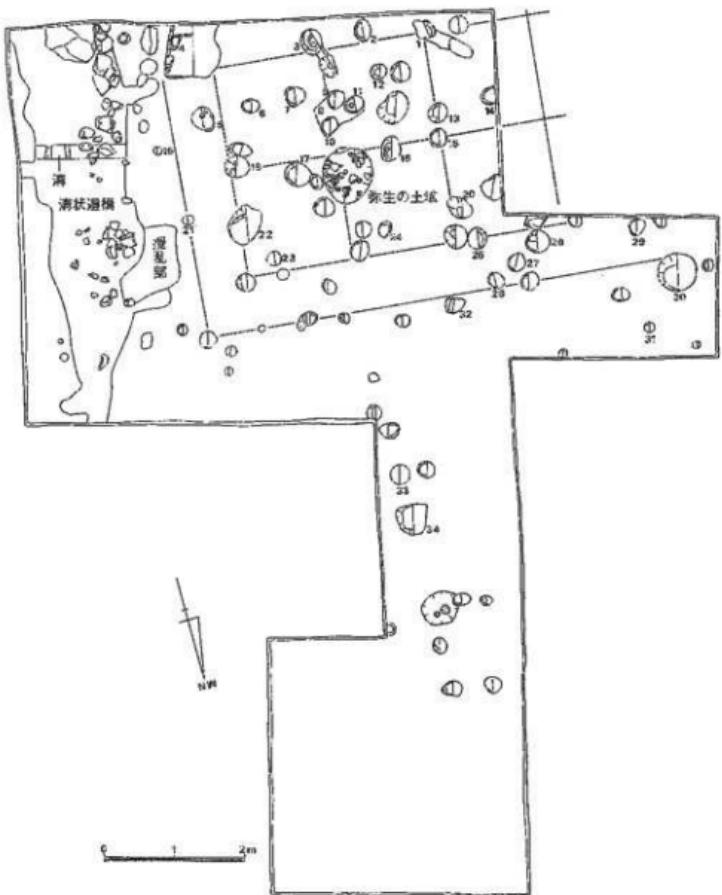
T19（第8図）において多くの柱穴と土塹及び溝状遺構を検出した。柱穴は円形で20~30cmを測るもののが殆んどで、上面はかなり削平されている。覆土は黒褐色を呈するものが多く、図中番号を付している柱穴は土器等の遺物を包含しているものである。柱穴の埋まりとしては、現在東・北に施を有する2×3間の掘立柱建物が存在する。柱間距離は150cmで、未掘部に更に広がるものと考えられる。また、この建物に付随するものかと推定される溝が東側を南北に走っている。溝幅約35cm位であるが、建物との距離が離れており、雨落ちのための溝とは考えられない。



第6圖  
T-15杭列出土狀況  
(1/30)



第7図 T-17満出土状況 (1/40)

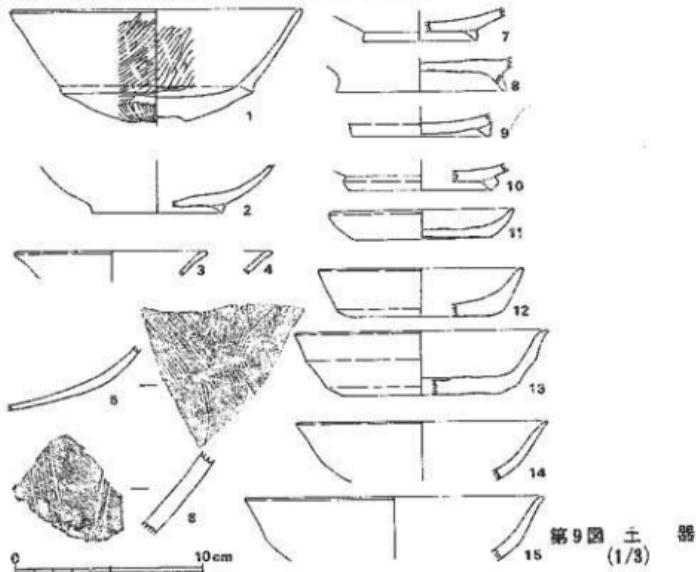


第8図 T-19検出構造(1/80)

### 3. 出土遺物

#### ・土器・陶磁器（第9図、図版4）

1は土師器高杯部で、復元口径154mm、杯部高60mmを測る。内湾気味に立ち上がる杯部に外上方へ長く延びる口縁部がつく。口縁端部は平らにおさめ面をなす。調整は内外面共にナデたのちヘラミガキを施している。色調は明茶色を呈し、胎土・焼成共に良好である。T16の灰茶色粘土層出土。2は土師器例である。復元高台径70mmを測る。調整は内外面共に器表が荒れており不明である。高台は貼付高台で、先端はつぼまっている。胎土は精良で微細な金雲母を含んでいる。色調は茶色を呈し、焼成は良好である。底部にヘラ切りの痕跡を留める。T19の柱穴24より出土。3は復元口径102mmを測る土師器柄口縁部片で、内外面共にナデの後ヘラミガキを施しており、滑沢がある。また内外面共に黒色を呈している。胎土は精良で、微細な金雲母を含み、焼成良好である。T19の柱穴22より2片出土した。4は3に相似した形状を示す柄で、内外面黒色を呈している。調整は不明。胎土精良で金雲母を含んでいる。焼成は良好である。T19の柱穴25より出土。5は瓦質の土鍋底部と推される破片で内面ナデ、外面ハケ調整である。外面にはススが付着している。胎土は精良で焼成は良好である。T14の灰茶色粘土層より出土している。6は土師質の摺鉢片で、内外面共にナデ調整。内面には5条一単位の摺鉢目がついている。色調は乳白色を呈し、焼成は不良である。胎土は精良。T19の柱穴27より出土している。



第9図 土器  
(1/3)

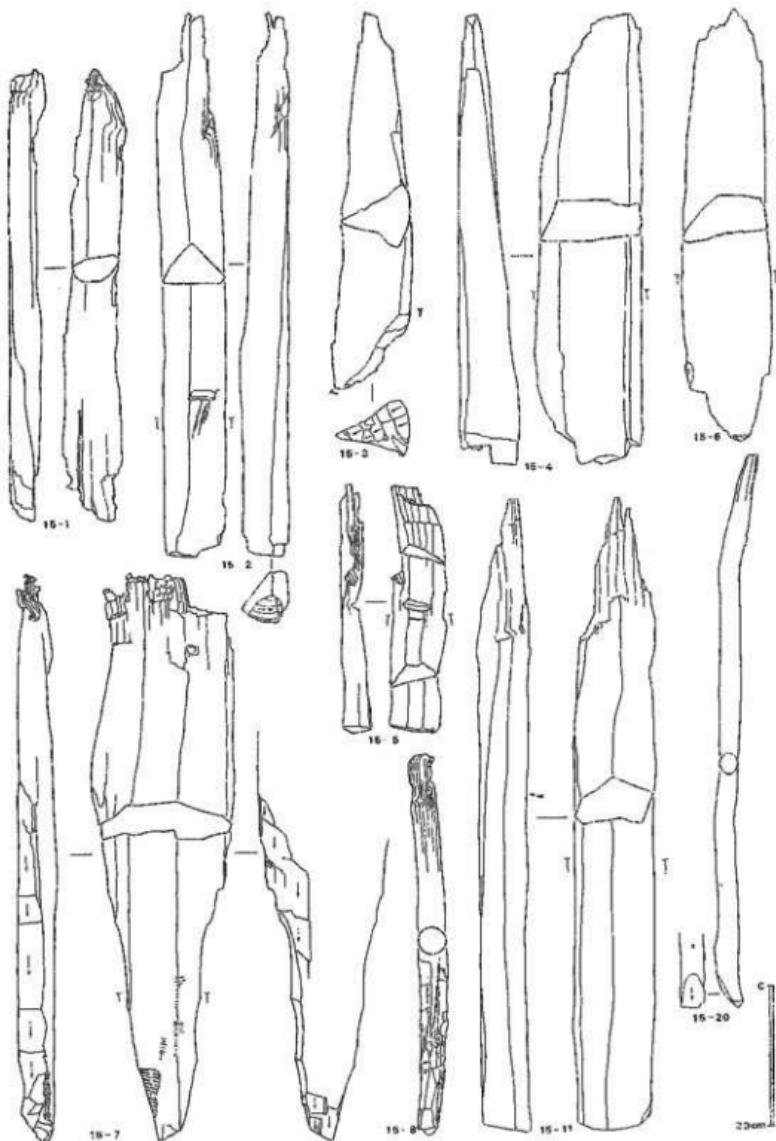
7以降は全て表掲資料である。7は土師器底片で外面灰橙色、内面灰黑色を呈す。胎土は精良で金雲母を含む。高台は貼付高台。8は土師器底片で高台は若干踏んばる。胎土は精良で焼成良好。9は土師器底片で内黒釉である。内面はヘラミガキを施し、底部にヘラ切りの痕跡を留める。貼付高台である。胎土は精良で焼成は良好である。10は土師器底片で内外面共に黒色を呈す。高台は貼付けており、外に踏ん張る。胎土は精良で微細な金雲母を含む。焼成は良好である。11は土師器皿で口径96mm、器高16mmを測る。底部にヘラ切りの痕跡を残す。12は土師器杯で、復元口径109mm、器高25mmを測る。調整不明。赤橙色を呈し、胎土・焼成共に良好である。13は土師器杯で、やや肉厚の底部に外反する口縁部がつく。復元口径134mm、器高34mmを測る。内外面共にナデ調整。14は土師器杯口縁部片で復元口径134mmを測る。底部から立ち上がる口縁部はつぼまり気味に外反する。色調は白橙色を呈し、胎土は精良、焼成良好である。15は14と相似した形狀を示す土師器片で、復元口径158mmを測る。調整は内外面共にナデで仕上げる。色調は淡黄褐色を呈し、焼成良好。胎土は精良である。

図版4に示すのはT17溝出土の陶磁器である。遺物は磯間より出土したもので多くは江戸中期以降の所産である。同図右上の楕2片は、この溝の掘削期のものであり、明治初期に再盛した型紙捏りによるものである。

これらの外に、弥生式土器、石器、瓦片、石鍋片、輸入陶磁器等の出土を見ているが、それらの詳細については、次報に掲載する予定である。

#### ・杭(第10図、図版4)

T15より出土した杭のうち、10点を図示した。枝番号は第6図の番号と一致する杭である。15-1はスギ材を半割して杭としたもので、先端部は僅かに焼いている。15-2は断面三角形を呈す。スギ材を荒削りしたもので、先端部は細かい加工が施されている。先端部から20cm程を焼いている。15-3もスギ丸太を荒削りして杭としている。先端部は一方から細かい調整を施し、尖端部を形成。この部位を焼いている。15-4も荒削りして杭としたもので、先端部は尖がらない。断面梯形を成し、先端部から中程まで焼いている。材質はスギ。15-5もスギ材で板状をなしている。先端部は平坦面をなし、杭としては不向きの感を受けるが、泥質土であるため使用されている。先端から中程まで焼いている。15-6もスギ材で荒削りのまま使用している。先端部は潰れの状態を示し、15-6までを焼いている。15-7はスギ材を利用した杭で、荒削りの後、先端部を両側から尖鋸に作り出している。また尖端部には工具痕かと推される痕跡を残している。15-8はサクラ材かと推されるもので先端部を入念に仕上げている。15-11はスギ材を荒削りしたもので、先端部は切断している。体幹中位まで焼いている。15-20は材不明で、若干反りのある枝の尖端を一方から加工している。



第10図 杭実測図 (1/8)

### III まとめ

前章までにおいて、第二年次の調査概要を述べた。本章においてそれらの締めを行い、本年度分の総括としたい。

調査に当っては、第一年次に使用した朱里跡跡の推定線を基本にしてトレントを設定した。T11~15・18はその推定線上に当る。これらのトレントの中では、遺構と認められるのはT14の杭列とT15の杭列である。杭列の主軸はともに偏る傾向を見せる。このことは前年度検出した「しがらみ様遺構」もまた同様である。さて、第4図で示した柱状図によれば、自然貝層を包含する青灰色粘土層が徐々に堆積し、標高1.5mを上回る段階で、人為的な加工が施された木片あるいは杭列が検出されている。即ち、これらを包含する灰茶色粘土層は後世の人為を受け、かなり酸化された層と考えられるのである。この灰茶色粘土層を鍛層と捉えて、前年度の結果を加味すれば、T9において検出した「しがらみ様遺構」と今次T15の杭列及びT14の杭列は同時期に存在した可能性は高い。しかしこれら…速のものと考えられる遺構を朱里に伴うものと判断するに足る資料は得ておらず、來年度の調査に期するところである。

また、「しがらみ様遺構」の年代値（付録T・N-5296参照）も出ており、かつT19から検出している遺物の中にも対応できそうな資料があり、朱里の成立と絡めて後考を要する。

T17において南北に走る溝及び堅緻に結った整地層を検出した。溝は明治期に掘削されたもので、現在の市立小野小学校の前進である校地の一部と推定される。この溝の中には疊とともに江戸中期以降の陶磁器が存在し、近くに「館」と伝えられるような建物が存在すると考えられる。

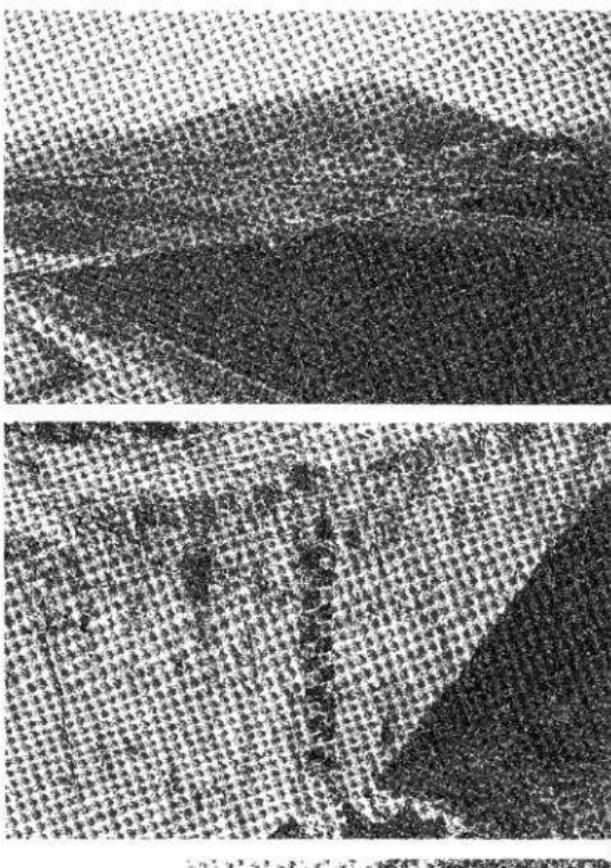
以上、本年度の概略を述べたが、当該地域の調査の進捗によって、諫早の潜在的な活力をえた干拓地の変遷が次第に闡明化されるであろう。

#### 〈引用・参考文献〉

- 鷹田 泰彦：「有明海の海底地植物」『長崎大学教育学部自然科学研究報告』第18号、1967  
土肥 利男：『諫早湾岸干拓史』長崎県、1957  
『多良山麓研究』1965  
津邊 鶴彌：『和名類聚抄御名考證』1966  
長崎県史編集委員会：『長崎県史－古代・中世編－』

# 図版



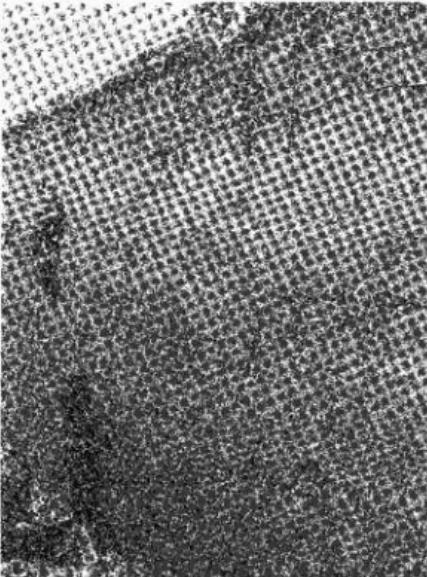


図版1

遺跡全景（北西より）

— T14分析サンプル採取状況（東壁）

— T14土層堆積状況（東壁）



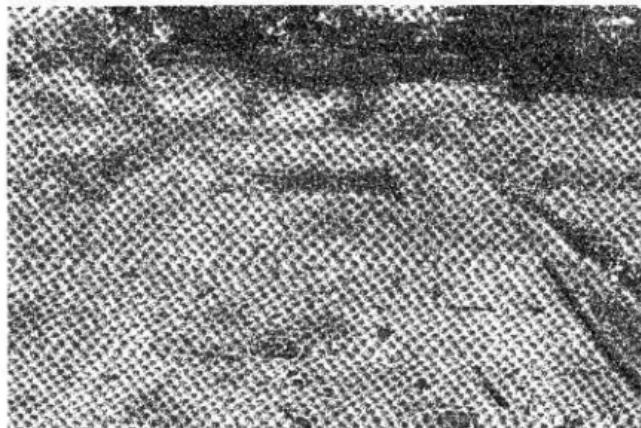


図版 2

T15漬構検出状況(北より)

同上詳細

同上

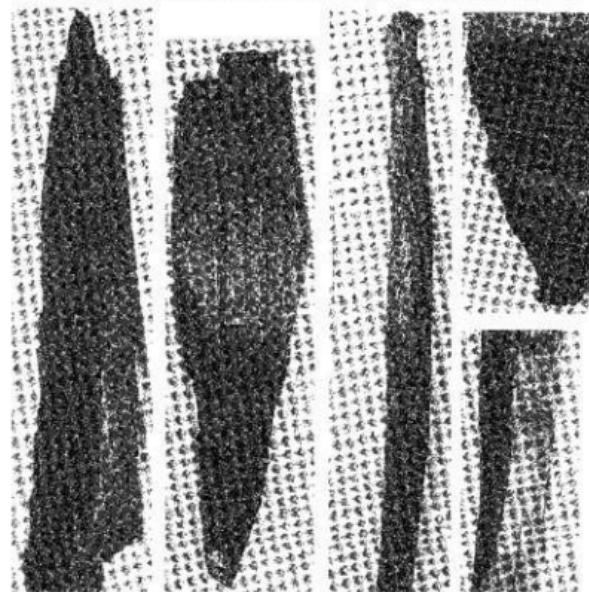
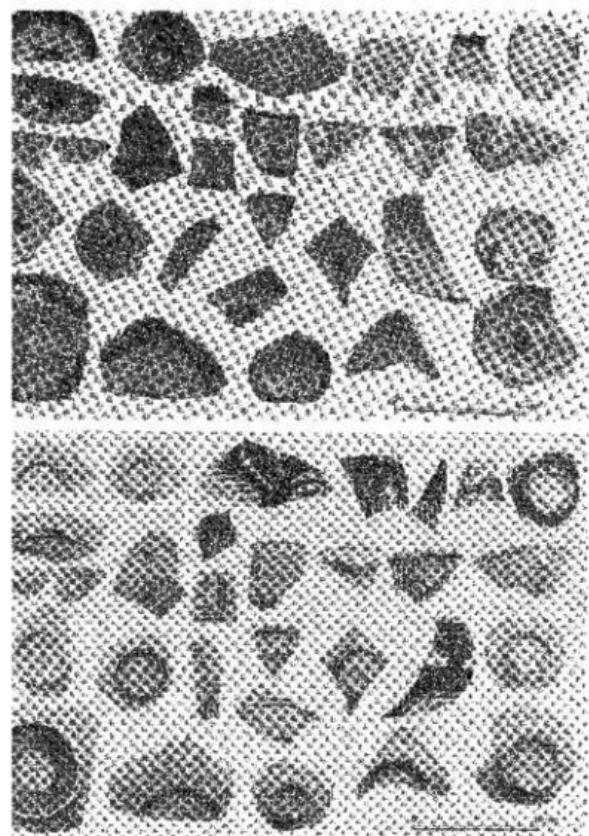


図版 3

T17溝(北より)

同上詳細(南より)

T19遺構検出状況(南より)



圖版 4

T17 满出土磁器

同上 (裏面)

T15出土杭

No. 3	No. 7	No. 8
		No. 8 先端部

# 付 編



# I 年代測定結果報告

年測 第 KN-87015号  
昭和 63 年 3 月 7 日

長崎県諫早市教育委員会

殿

社団法人 日本アイソトープ協会  
東京都文京区本郷二丁目28番45号  
電話 東京 03 (946) 7-1111

## 年代測定結果報告書

昭和 62 年 12 月 7 日に受取りました C-14 試料 5 個の測定結果がでましたのでご報告します。

当方のコード

依頼者のコード

C-14 年代

### 宮崎館遺跡等

N-5296	木片のサンプル	1010 ± 85yB.P. ( 985 ± 80yB.P.)
N-5297	第 1 頁層	3400 ± 90yB.P. ( 3300 ± 90yB.P.)
N-5298	第 2 頁層	4430 ± 95yB.P. ( 4300 ± 95yB.P.)
N-5299	第 3 頁層	3840 ± 95yB.P. ( 3730 ± 90yB.P.)
N-5300	第 4 頁層	4490 ± 95yB.P. ( 4360 ± 95yB.P.)

年代は  $^{14}\text{C}$  の半減期 5730 年 (カッコ内は Libby の値 5568 年) にもとづいて計算され、西暦 1950 年よりさかのばる年数 (years B.P.) として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読みの誤差から計算されたもので、 $^{14}\text{C}$  年代がこの範囲に含まれる確率は約 70 % です。この範囲を 2 倍に拡げますと確率は約 95 % となります。なお  $^{14}\text{C}$  年代は必ずしも真の年代といとしくない事に御注意下さい。(御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。)

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいますようお願い申し上げます。





## II 珪藻分析・花粉分析報告

諫早市教育委員会

宮崎館遺跡試料 珪藻分析・花粉分析報告

貴、諫早市教育委員会殿より御依頼のありました、宮崎館遺跡試料の珪藻分析・花粉分析が終了致しましたので、その結果を下記の通りご報告申し上げます。

記

- |        |              |
|--------|--------------|
| 1.はじめに | p. (1)       |
| 2.試料   | p. (1)       |
| 3.珪藻分析 | p. (2)~(11)  |
| 4.花粉分析 | p. (13)~(19) |



## 1. はじめに

今回の試料採取地点は諫早平野の干拓地内に位置しており、金比羅岳より北方に延びる丘陵に接して立地する。現在、干拓地内では水田耕作が営まれている。本地点周辺は、過去において条里制が施行されたと考えられており、この干拓地の表層下に堆積する青灰色の粘土層がいつ頃、どのようにして耕地化したのかなど多くの課題を抱えている。今回は、その青灰色粘土層から上位の堆積層について、特に堆積環境およびその周辺の植生変化を推定することを目的として、珪藻・花粉分析を行った。

## 2. 試 料

試料は、T-14セクションの断面から採取した3点である(図1)。土層は下位より青灰色粘土層、灰色粘土層、灰茶色粘土と順に堆積しており、灰茶色粘土は古墳時代以降の堆積物とみられている。

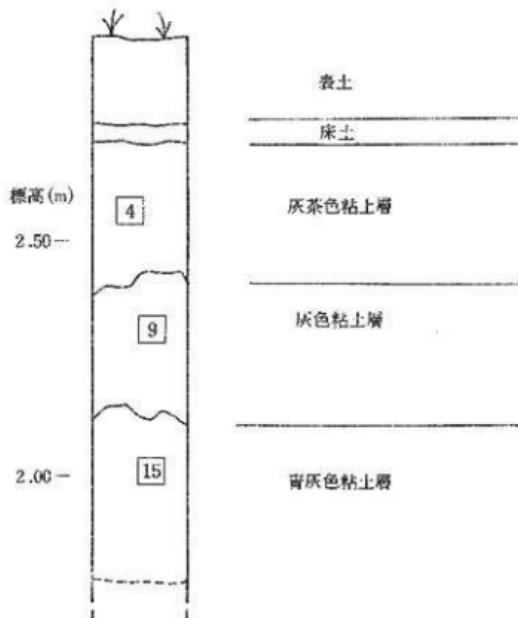


図1 宮崎館遺跡T-14セクションにおける珪藻・花粉分析試料の採取層位

### 3. 珪藻分析

#### • 3-1 方法および結果の表示法

珪藻化石の抽出は、以下に述べる方法で行った。

試料を秤量（湿重、5g）し、過酸化水素水 ( $H_2O_2$ ) と塩酸 (HCl) で処理を行ない試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。蒸留水を満たし、7時間以上放置した後、上澄み中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う（予め、分散剤のビロリン酸ナトリウムを加えておき分散し易くしておく）。上澄み液が透明に近くなるまで、この操作を繰り返す。次に、試料中に含まれる砂を比重の差を利用して取り除くために、L字形管分離を行う。珪藻殻の濃縮を終了した試料は、検鏡し易い濃度に希釈し、マイクロビペットで0.4cc測り取り、18×18mmのカバーガラス上に静かに滴下し、パラフィン伸展器で対流の起こらない温度で乾燥する。乾燥して一様に展開した試料上に封入剤のブリュウラックスを滴下、加熱し溶剤のエタノールを蒸発する。次に、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻を200個体以上になるまで回収する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。この際、珪藻殻が半分以上破損したものは、算定から除外した。

同定及び生態性については、Kolbe (1927), Hustedt (1930, 1959, 1961～1966), Van Landingham (1970), Patrick and Reimer (1966, 1975), Patrick (1977), Florin (1970), Watanabe et al (1986), K.Krammer & Lange-Bertalot (1986)などを参考にした。

各試料から検出された珪藻は、Kolbe(1927)が塩分濃度に対する適応性によって分類した基準に基づいて真塩性 (Euhalobous-marine forms, 30～40% salt content), 中塩性 (Mesohalobous-brackish water forms, 5～20% salt content), 貧塩性 (Oligohalobous-widespread in freshwater, 0～5% salt content) に区分した。

貧塩性については、塩分 (Halobion rate), 水素イオン濃度 (pH), 水の流動性 (Current rate) の各適応性に対する生態区分を行い、表にまとめた（表1）。

珪藻化石が100個体以上検出された試料については、全体を基数とした出現率1%以上を示す種群について珪藻化石群集密度図を作成した（図2）。図中には、全体を基数として、真塩性（－海生種）・中塩性（－汽水生種）・貧塩性種（－淡水生種）の相対頻度、貧塩性種を基数として、塩分・pH・流水の相対頻度を示す帶グラフも併記した。

◎貧塩性種（塩分濃度0～5%）の塩分・pH・流水に対する適応性は、次のようにまとめられる（Van Landingham, 1970；田中 et al, 1977）。なお、適応性の最後に書かれた略号は、結果表に載せたものと同一である。

#### 〈塩分に対する適応性〉

- ◆貧塩好塩性 (Oligohalobous-halophilous) : 淡水域にも普通に産するが、小量の塩分がある方がよく生育するもの……Ogh-hil
- ◆貧塩不定性 (Oligohalobous-indifferent) : 淡水域に固有であるが、小量の塩分があっても、これによく耐えることのできるもの……Ogh-ind
- ◆貧塩嫌塩性 (Oligohalobous-halephobous) : 小量の塩分にも耐えることのできないもの……Ogh-hob
- ◆貧塩不明 (Unknown) : 塩分に対する適応性が不明なもの……ogh-unk

#### 〈pHに対する適応性〉

- ◆真アルカリ性 (Alkalibiontic) : pH.7 以上 (pH.8.5) のアルカリ性水域に出現するもの……al-bi
- ◆好アルカリ性 (Alkaliphilous) : pH.7 付近に出現、pH.7 以上で最もよく出現するもの……al-ph
- ◆pH 不定性 (Indifferent) : pH.7 付近で最もよく生育するもの……ind
- ◆好酸性 (Acidophilous) : pH.7 付近に出現、pH.7 以下で最もよく生育するもの……ac-il
- ◆真酸性 (Acidobiontic) : pH.7 以下に出現、pH.5.5 以下で最もよく生育するもの……ac-bi
- ◆pH 不明 (Unknown) : 水素イオン濃度に対する適応性が不明なもの……unk

#### 〈流水に対する適応性〉

- ◆真正止水性 (Limnobiontic) : 止水にのみ出現するもの……l-bi
- ◆好止水性 (Limnophilous) : 止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの……l-ph
- ◆流水不定性 (Indifferent) : 流水にも止水にも普通に出現するもの……ird
- ◆好流水性 (Rheophilous) : 流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの……r-ph
- ◆真流水性 (Rheobiontic) : 流水にのみ出現するもの……r-bi
- ◆流水不明 (Unknown) : 流水に対する適応性が不明なもの……unk

#### • 3-2 結 果

38属・72種・11変種・未同定10種類の計93分類群の珪藻化石が検出された。3試料とも海水生種が優占し、70~80%を占める。逆に淡水生種は少なく、10%未満である。3試料の珪藻化石群集の出現傾向は類似しており、1つの珪藻化石群集帯 (MYD-I 帯とする) として捉えられる。

MYD-I 帯は、海水生で内湾・沿岸性の Paralia sulcata が優占することにより特徴付けられる。これに付随して、同じく内湾・沿岸性の Thalassionema nitzschiooides や、暖海性の

Cymotheca weissflogii, Trybliopterus coccineiformis, Thalassiosira oestrupii 等をともなう。海水一汽水生種の Cyclotella striata, 汽水生種の Nitzschia granulata, 淡水生種の Acnanthes exigua 等も検出された。優占種の Paralia sulcata は、東シナ海沿岸部や日本海等の淡水の影響を受けた低塩分海水域に特徴的に産出することから、低塩分海水域を特徴付ける種とされている (Tanimura, 1981)。また、隨伴種の Thalassionema nitzschioides は、前種よりは幾分塩分濃度の高い水域に多産するとしている。

いずれにせよ、このような珪藻群集からみるかぎり、試料堆積当時の水域の塩分濃度は、海水よりもやや低かったものと思われる。

### • 3-3 地質環境

珪藻群集からみると、下位より湖土とされる青灰色粘土層や漸移層とされる灰色粘土層と、既にクラックの入った古墳時代以降とされる灰茶色粘土層とは、堆積環境に大きな差は認められない。その堆積環境は、暖流の流入する内湾奥部あるいは入り江であったと推定できる。また、塩分濃度は海水よりも低く、陸水の影響を受けた海水～汽水域であったと考えられる。よって、試料の堆積当時は、丘陵近くまで海が進入しており、干拓事業の開始以前の諫平洋の景観と大差はなかったであろう。堆積物の時代は、上部の灰茶色粘土層が古墳時代以降とされており、その当時まで内湾であったことになる。今後の検討課題としては、時間・空間的な広がりをもった古墳境の検討が必要である。つまり土器編年・テフラ同定・<sup>14</sup>C年代測定等により時間面をおさえ、さらに多地点で古環境を検討する必要があると考える。また、繩文海進時に形成されたとみられる自然貝層の貝種ばかりではなく、珪藻群集についても検討する必要がある。

### 〈引用文献〉

- 後藤 敦一 (1986) : 錦野川河口の珪藻群集, 珪藻学会誌, 第2巻, p.103-115  
鹿島 熊 (1986) : 沖積層中の珪藻遺骸群集の推移と完新世の古環境変遷, 地理学評論 vol.59,no.7,p.383-403.  
Kolbe,R.W.(1927) : Zur Okologie Morphology, und Systematik der Brackwasser Diatomeen, Pflanzenforschung, 7, p.1-146  
Hustedt,F.(1920) : Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Lande Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiets, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol.7, Leipzig, Part 1, 920p  
unter Berücksichtigung der übrigen Lande Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiets, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol.7, Leipzig, Part 2, 845p  
Hustedt,F.(1961-1966) : Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, unter Berücksichtigung der übrigen Lande Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiets, in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol.7, Leipzig, Part 3, 816p  
Hustedt,F.(1930) : Bacillariophyta (Diatomeae). In Pascher, Die Süßwasser-Flora Mitteleuropas, Part 10, 466p. Jena, C. Fischer

- 中島啓治・田中宏之・吉田武雄 (1979) : 奥利根地域の珪藻類, 総奥利根地域学術調査報告書, p.122-146
- Patrick,R. and Reimer,C.W.(1966) : The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii, vol.1.668p. Monographs of Acad.Nat.Sci. Philadelphia 13.
- Patrick,R. and Reimer,C.W.(1975) : The diatoms of the United States exclusive of Alaska and Hawaii, vol.2, Part 1.213p. Monographs of Acad.Nat.Sci Philadelphia 13.
- 田中宏之・吉田武雄・中島啓治 (1977) : 奥利根地域の珪藻類, 奥利根地域学術調査報告書II, p.124-135
- Tanimura,Y.(1981) : Late Quaternary diatoms of the Sea of Japan, Sci. Rep. Tohoku Univ., second ser. (Geology), no.51,p.1-36.
- Van Landingham(1970) : Origin of an early non-Marine Diatomaceae Deposit in Broadwater county, Montana, U.S.A. Diatomaceae II Nova Hedwigia Heft 31, p.449-473

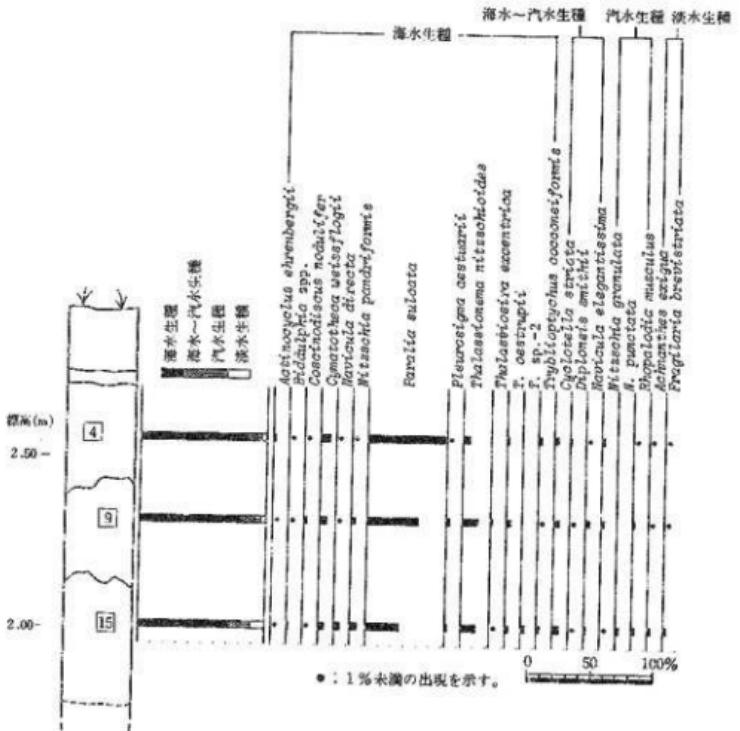
表1 宮崎館遺跡T-14セクション試料における珪藻分析結果

Species Name	Ecology			4	9	15
	H.R.	pH	C.O. <sub>2</sub>			
<i>Actinocyclus shobergii</i> Ralfs	Euh	-	-	1	4	3
<i>Actinocyclus shobergii</i> var. <i>tenuella</i> (Breb.) Hustadt	Euh	-	-	1	-	-
<i>Actinoptychus esmeralis</i> (Ehr.) Ehrenberg	Euh	-	-	-	2	1
<i>Aphialora</i> sp.	Euh	-	-	-	-	2
<i>Bidaria lata</i> Roper	Euh	-	-	3	5	4
<i>Bidaria lata</i> sp.	Euh	-	-	-	1	1
<i>Compsodictyon</i> sp.	Euh	-	-	2	7	2
<i>Coscinodiscus nodulifer</i> A.Schmidt	Euh	-	-	1	-	3
<i>Coscinodiscus radiatus</i> Ehrenberg	Euh	-	-	1	-	3
<i>Cyanozira bispina</i> Grunow	Euh	-	-	-	-	1
<i>Cyanozira weissflogii</i> (Grun.) Hendey	Euh	-	-	25	16	11
<i>Diploneis vacillans</i> (F.S.) Cleve	Euh	-	-	-	-	1
<i>Diploneis weissflogii</i> (A.Schmidt) Cleve	Euh	-	-	2	5	1
<i>Grammatocystis aciculata</i> M.Smith	Euh	-	-	-	1	-
<i>Gyrosigma bellum</i> (Ehr.) Rohdendorf	Euh	-	-	1	-	-
<i>Hydrocoleus scutellifer</i> (Kutz.) Grunow	Euh	-	-	1	3	-
<i>Merula directa</i> (W.Smith) Ralfs	Euh	-	-	2	5	11
<i>Merula murina</i> Ralfs	Euh	-	-	1	-	3
<i>Merula</i> sp.-1	Euh	-	-	-	-	3
<i>Merula</i> sp.	Euh	-	-	-	-	1
<i>Mitrochla scutinata</i> (W.Smith) Grunow	Euh	-	-	1	-	-
<i>Mitrochla lanceola</i> Grunow	Euh	-	-	-	-	1
<i>Mitrochla quadrivalvis</i> Gregory	Euh	-	-	1	8	14
<i>Mitrochla</i> sp.	Euh	-	-	-	-	3
<i>Paralia soluta</i> (Ehr.) Cleve	Euh	-	-	185	119	81
<i>Pleurosigma aestuaria</i> (Breb.) W.Smith	Euh	-	-	1	5	4
<i>Pleurosigma angulosum</i> (Quast) W.Smith	Euh	-	-	-	1	2
<i>Rhizentente elliptica</i> Brightwell	Euh	-	-	1	1	-
<i>Roseria tessellata</i> (Roper) Grunow	Euh	-	-	-	1	-
<i>Suriella instans</i> (Ehr.) Hustadt	Euh	-	-	2	5	3
<i>Thalassiosira nitelloides</i> Grunow	Euh	-	-	15	37	35
<i>Thalassiosira excentrica</i> (Ehr.) Cleve	Euh	-	-	-	4	3
<i>Thalassiosira trypanophora</i> (Grun.) Jorgensen	Euh	-	-	-	1	1
<i>Thalassiosira costarupi</i> (Ditrich. Proksma-Lavrenko)	Euh	-	-	4	9	6
<i>Thalassiosira trifolia</i> Fryxell and Hasle	Euh	-	-	-	1	-
<i>Thalassiosira</i> sp.-1	Euh	-	-	2	1	2
<i>Thalassiosira</i> sp.-2	Euh	-	-	-	-	10
<i>Thalassiosira</i> sp.	Euh	-	-	-	1	3
<i>Thalassiothrix frauenfeldii</i> Grunow	Euh	-	-	1	2	1
<i>Thalassiothrix longissima</i> Cleve and Grunow	Euh	-	-	-	3	-
<i>Trachymita aspera</i> (Ehr.) Cleve	Euh	-	-	1	2	1
<i>Triblopychus cocconeiformis</i> (C.L.) Hendey	Euh	-	-	7	2	6
<i>Cocconeis scutellum</i> Ehrenberg	Euh-Meh	-	-	1	2	1
<i>Cyclotella striata</i> (Kutz.) Grunow	Euh-Meh	-	-	10	11	15
<i>Cyclotella stylorum</i> Brightwell	Euh-Meh	-	-	-	-	1
<i>Diatomis salinii</i> (Breb.) Cleve	Euh-Meh	-	-	4	3	2
<i>Diploneis smithii</i> var. <i>paupera</i> (Grun.) Hustadt	Euh-Meh	-	-	1	-	-
<i>Fusulina lewisiensis</i> Greville	Euh-Meh	-	-	-	-	1
<i>Merula elegantissima</i> Meister	Euh-Meh	-	-	1	10	4
<i>Mitrochla constricta</i> (Gres.) Grunow	Euh-Meh	-	-	-	1	-
<i>Mitrochla nebulosa</i> (Breb.) Grunow	Euh-Meh	-	-	3	-	1
<i>Mitrochla scalaris</i> (Ehr. n.s.) W.Smith	Euh-Meh	-	-	1	1	-
<i>Mitrochla sigma</i> (Kutz.) W.Smith	Euh-Meh	-	-	1	1	1
<i>Mitrochla</i> sp.	Euh-Meh	-	-	-	-	1
<i>Rhaboneis amphiceros</i> Ehrenberg	Euh-Meh	-	-	-	1	1
<i>Rhaboneis surirella</i> (Ehr.) Grunow	Euh-Meh	-	-	3	-	1
<i>Suriella atom</i> Hustadt	Euh-Meh	-	-	-	-	1

<i>Achaearanea brevipes</i> var. <i>intermedia</i> (Kuetz.)Cleve	1	Meh	1	1	1	-	-	1
<i>Achnanthus hastatus</i> Grunow	1	Meh	1	1	1	1	1	1
<i>Achnanthus suffruticosus</i> Agardh	1	Meh	1	1	-	-	-	1
<i>Coleonema liber</i> (V.Seitz)Cleve	1	Meh	1	1	-	-	-	1
<i>Havlicea sellinorum</i> Grunow	1	Meh	1	1	-	-	-	1
<i>Hitzschia aciculata</i> (Gres.)Grunow	1	Meh	1	1	-	-	-	1
<i>Hitzschia coccophora</i> Grunow	1	Meh	1	1	2	-	-	1
<i>Hitzschia granulata</i> Grunow	1	Meh	1	1	7	7	2	
<i>Hitzschia longistriata</i> var. <i>subtilis</i> Grunow	1	Meh	1	1	-	2	2	
<i>Hitzschia obtusa</i> V.Smith	1	Meh	1	1	-	-	-	1
<i>Hitzschia punctata</i> (V.Smith)Grunow	1	Meh	1	1	-	-	-	7
<i>Rhopalodia mucoroides</i> (Kuetz.)C.Müller	1	Meh	1	1	2	4	5	
<i>Achaearanea exigua</i> Grunow	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	1	1
<i>Bacillaria paradoxa</i> Gmel'n	1	Oph-hil	1	at-il	1	Ind	1	-
<i>Coleonema bacillum</i> (Grun.)Hereschkovsky	1	Oph-hil	1	at-il	1	r-ph	1	-
<i>Diploneis soustada</i> (Greb.)Cleve	1	Oph-ind	1	at-il	1	r-ph	1	3
<i>Fragilaria brevispiralis</i> Grunow	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	1	6
<i>Fragilaria constricta</i> var. <i>vestita</i> (Ehr.)Grunow	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	1	-
<i>Fragilaria viraceosa</i> var. <i>subelegans</i> Grunow	1	Oph-hil	1	at-il	1	Ind	-	3
<i>Frustularia vulgaris</i> (Thwait.)de Toni	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	-	1
<i>Gaochaete granulata</i> Ehrenberg	1	Oph-ind	1	at-hil	1	r-ph	-	-
<i>Havlicea elatia</i> (Ehr.)Kuetzins	1	Oph-hil	1	at-il	1	Ind	-	2
<i>Navicula contracta</i> Grunow	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	-	-
<i>Navicula protrusa</i> Grunow	1	Oph-hil	1	Ind	1	Ind	-	1
<i>Navicula pygmaea</i> Kuetzing	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	1	-
<i>Navicula viridis</i> var. <i>rotundata</i> (Kuetz.)Cleve	1	Oph-ind	1	at-il	1	r-ph	-	2
<i>Nodularia triplex</i> var. <i>angustata</i> (Ehr.)Cleve	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	-	-
<i>Hitzschia amphibia</i> Grunow	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	1	1
<i>Hitzschia frustulum</i> (Kuetz.)Grunow	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	-	1
<i>Hitzschia obtusa</i> var. <i>cooperifera</i> Grunow	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	-	1
<i>Hitzschia palma</i> (Kuetz.)W.M.Smith	1	Oph-ind	1	at-il	1	Ind	1	1
<i>Hitzschia trichionella</i> var. <i>victoriae</i> Grunow	1	Oph-hil	1	at-il	1	Ind	1	2
<i>Oospheira martyi</i> Heribaud	1	Oph-ind	1	at-il	1	r-ph	-	-
<i>Pinnularia brunnii</i> var. <i>americana</i> (A.Meyer)Hustedt	1	Oph-hil	1	ac-bl	1	Ind	-	1
<i>Pinnularia gibba</i> Ehrenberg	1	Oph-ind	1	Ind	1	Ind	-	1
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.)Cleve	1	Oph-ind	1	Ind	1	r-ph	-	1
Marine Water Species	262	244	222					
Marine to Brackish Water Species	25	39	38					
Brackish Water Species	12	14	25					
Fresh Water Species	11	13	33					
Total Number of Diatoms	310	301	310					

## LEGEND

H.R.: 1275 - 9912 - 9126 - 74494	pH : 26940 - 29126 - 2628 - 71126	C.R.: 91242 - 9126 - 74494
Euh : 30126 (30126)	ac-bl : 30126	l-bl : 30126
Euh-Meh : 30126 - 30126	ac-il : 29254	l-ph : 29254
(30126 - 30126)	Ind : pH = 79126	Ind : 9126-74494
Meh : 30126 (11126)	at-bl : 30126-74494	r-bl : 30126-74494
Oph-hil : 1252 - 30126	at-il : 29980-74494	r-ph : 29980-74494
Oph-ind : 1252 - 2746	unk : pH = 746	unk : 9126-74494
Oph-hil : 1252 - 30126		
Oph-ind : 1252 - 746		



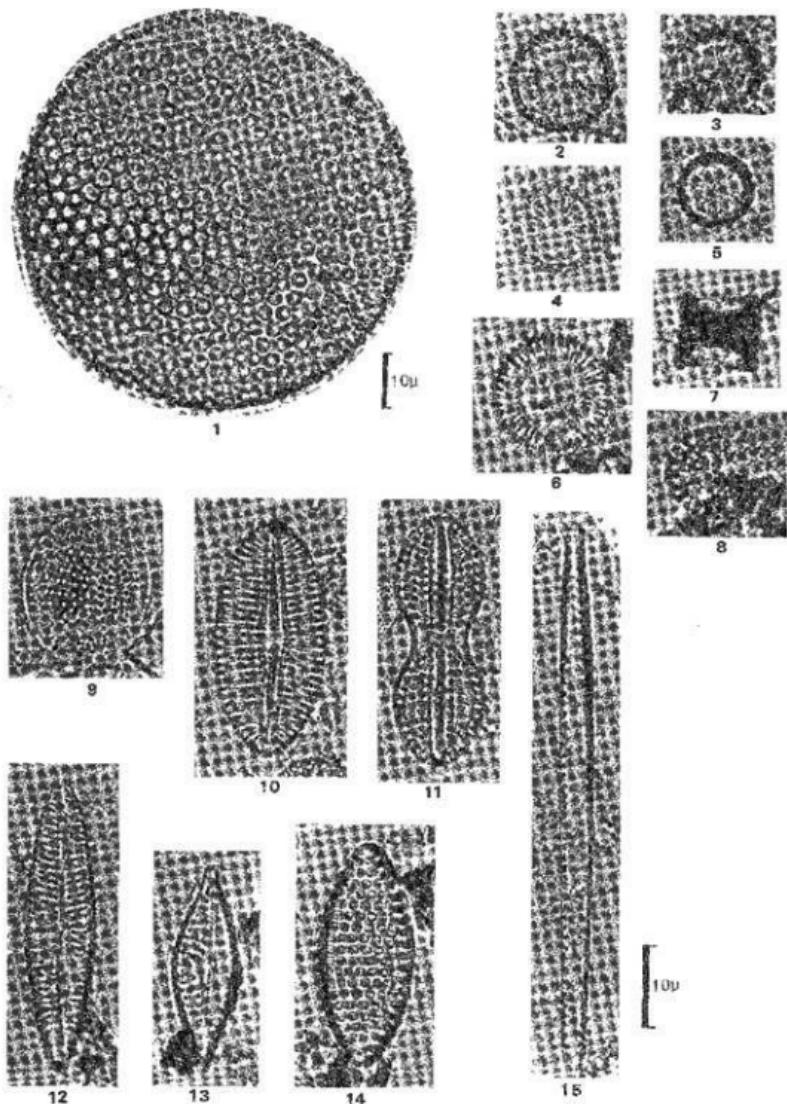
## 図版説明

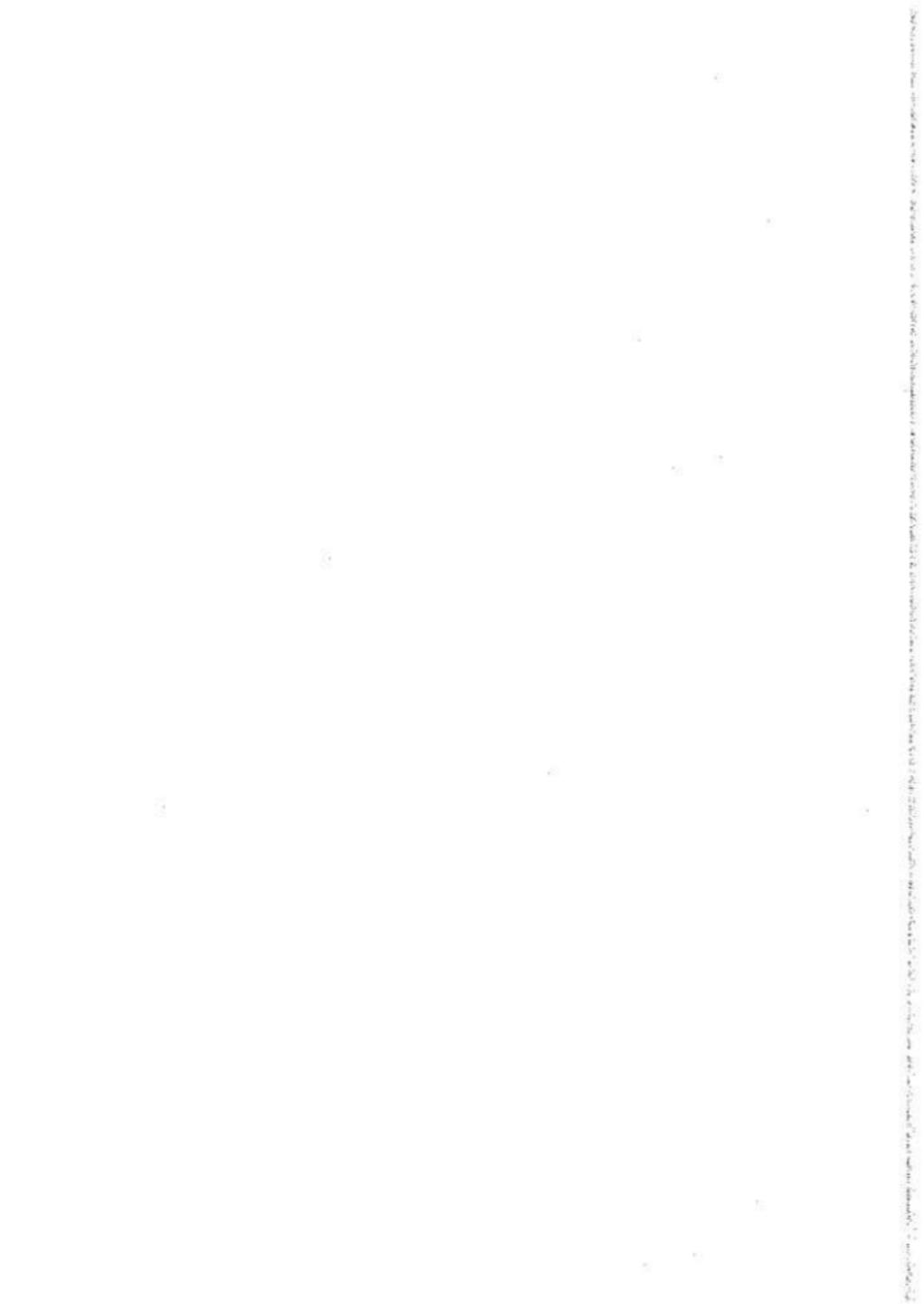
図版 1

写真番号	珪藻化石種名	試料番号
1	<u>Coscinodiscus radiatus</u> Ehrenberg	no.9
2	<u>Paralia sulcata</u> (Ehr.)Cleve	no.4
3	<u>P. sulcata</u> (Ehr.)Cleve	"
4	<u>P. sulcata</u> (Ehr.)Cleve	"
5	<u>P. sulcata</u> (Ehr.)Cleve	"
6	<u>Cyclotella striata</u> (Kuetz.)Grunow	no.9
7	<u>Paralia sulcata</u> (Ehr.)Cleve	no.4
8	<u>Tryblionptychus coccineiformis</u> (Cl.)Hendey	"
9	<u>Cymatotheca weissflogii</u> (Grun.)Hendey	"
10	<u>Diploneis smithii</u> (Breb.)Cleve	no.9
11	<u>D. weissflogii</u> (A.Schmidt)Cleve	"
12	<u>Navicula directa</u> (W.Smith)Ralfs	no.15
13	<u>N. elegantissima</u> Meister	no.9
14	<u>Mitzschia granulata</u> Grunow	no.4
15	<u>Thalassionema nitzschioides</u> Grunow	"



圖版 1





## 4. 花粉分析

### • 4-1 方法および結果の表示法

花粉胞子化石の抽出方法は、以下の通りである。

試料を15g 秤量し、フッ化水素(HF)処理により試料中の珪酸質の溶解と試料の泥化を行う。次に亜鉛(ZnBr<sub>2</sub> 比重2.2)を用いて無機物と有機物を分離させ、有機物を混集する。その有機物残渣について、アセトトリシス処理を行い植物遺体中のセルロースを加水分解し、最後にKOH処理により腐植酸の溶解を行う。処理後の残渣は、よく搅拌しマイクロビペットで適量をとり、グリセリンで封入する。検鏡においてはプレパラート全面を走査し、その間に出現した全ての種類(Taxa)について同定・計数した。

古植生の検討を行うために、計数の結果にもとづいて花粉化石群集変遷図を作成した。出現率は、樹木花粉は樹木花粉化石総数を、草本花粉・シダ類胞子は総花粉胞子化石数から不明花粉化石数を除いた数をそれぞれ基準として百分率で算出した。なお、複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

### • 4-2 結 果

3試料を通じて検出された化石の種類は、樹木花粉19種類、草木花粉9種類、シダ類胞子1種類の合計29種類と少なかった。また、3試料の花粉化石群集の出現傾向はほぼ類似しており、1局地花粉化石群集帯(MYP-T帯とする)として捉えられる。

MYP-T帯は、樹木花粉では照葉樹林を構成するアカガシ亞属・シイノキ属が80%前後で優占する。これに次いで落葉広葉樹花粉のコナラ亞属が10%前後出現するが、その他の落葉広葉樹花粉の種類は少ない。草木花粉は全般に少なく、イネ科・ヨモギ属などが僅かに出現するだけである。また、本帯では出現率に若干の変化が認められ、試料番号9以浅になると種類数が増加する。草木花粉では、抽水植物のガマ属が出現するようになる。

### • 4-3 考 察

周辺の台地上の植生は、試料番号15から4が堆積するまでほとんど変化しなかったと考えられ、シイ類・カシ類からなる照葉樹林が成立していたことが推定される。この森林には、ヤマモモなどの樹木も普通に認められたであろう。また、今回花粉化石は検出されなかつたが、クスノキ科の樹木も生育していたことが示唆される。このような照葉樹林は、本地点の北西に位置する北松浦郡里田原遺跡でも、縄文時代晩期とされる堆積層以深で認められている。また、その照葉樹林は縄文時代晩期夜臼式期以降の人類により破壊されたことが推定されている(安田, 1977)。今後、本地点においても年代的な検討を行い、これらの結果をふまえて空間的な比較検討を行うことが必要となろう。

調査地点周辺の低地の環境については、先述した珪藻分析結果から下位の青灰色粘土が堆積した場は海水から汽水域であったことが推定されている。花粉分析結果で、局地的な植生を反映している可能性が高いとされる草本花粉（特に水生植物）の出現率が低かったのは、このような水域環境に起因する可能性が高く、草本植物などは堆積域周辺ではほとんど生育出来なかったものと思われる。ただし、灰色粘土層（試料番号9）が堆積する頃になると、低地の環境は徐々に変化してきた可能性がある。これは、同層から草本花粉の種類が増加し、ガマ属などの抽水植物が出現することから伺われる。ガマ属などの抽水植物が生育するような淡水域となつたと推定される。このような変化は、海退に伴なつた現象として捉えられ、海水域であった場所が海退に伴い一部沼沢地化したことを見取っているとも考えられる。これについては、今後時間・空間的に多くの地点で分析を行うことによって明らかにされると考えられる。

### 〈引　用　文　獻〉

- 安田 審審 (1977)：北九州における2・3の泥炭の花粉分析、「文部省科研賞特定期「古文化財」「植物の起源と伝播に関する花粉分析学的研究—中間報告—」(中村 純 著) p. 11-24

表2 宮崎館遺跡T-14セクション試料における花粉分析結果

種 種(Taxa)	試料番号	4	9	15
樹木花粉				
モミ属	-	1	-	-
ツガ属	1	1	1	-
複雑管束型属	7	15	9	-
スギ属	3	1	-	-
イチイ科-イスガヤ科-ヒノキ科	4	2	-	-
ヤナギ属	-	1	-	-
ヤマモモ属	4	1	-	-
サワグルミ属	2	-	-	-
クマシデ属-アサガ属	10	5	1	-
ハンノキ属	2	3	-	-
コナラ属	74	19	28	-
アカガシ属	306	128	114	-
シイノキ属	252	116	111	-
エノキ属-ムクノキ属	1	-	2	-
バラ科	1	-	-	-
モチノキ属	2	1	-	-
トチノキ属	1	-	-	-
グミ属	1	-	-	-
イボタノキ属	-	1	-	-
草本花粉				
ガマ属	2	1	-	-
イネ科	7	9	7	-
カヤツリグサ科	2	1	1	-
クデ属	-	-	1	-
アカザ科	2	-	1	-
マメ科	2	-	-	-
セリ科	4	2	3	-
ヨモギ属	6	9	6	-
オナモミ属	1	-	-	-
不明花粉	18	10	12	-
シダ類孢子				
シダ類孢子	9	1	4	-
ボトリイオコッカス属	-	1	-	-
渦鞭藻類(双鞭毛藻類)	1	4	-	-
合計				
樹木花粉	671	295	266	-
草本花粉	26	22	19	-
不明花粉	18	10	12	-
シダ類孢子	9	1	4	-
総花粉・孢子	724	328	301	-

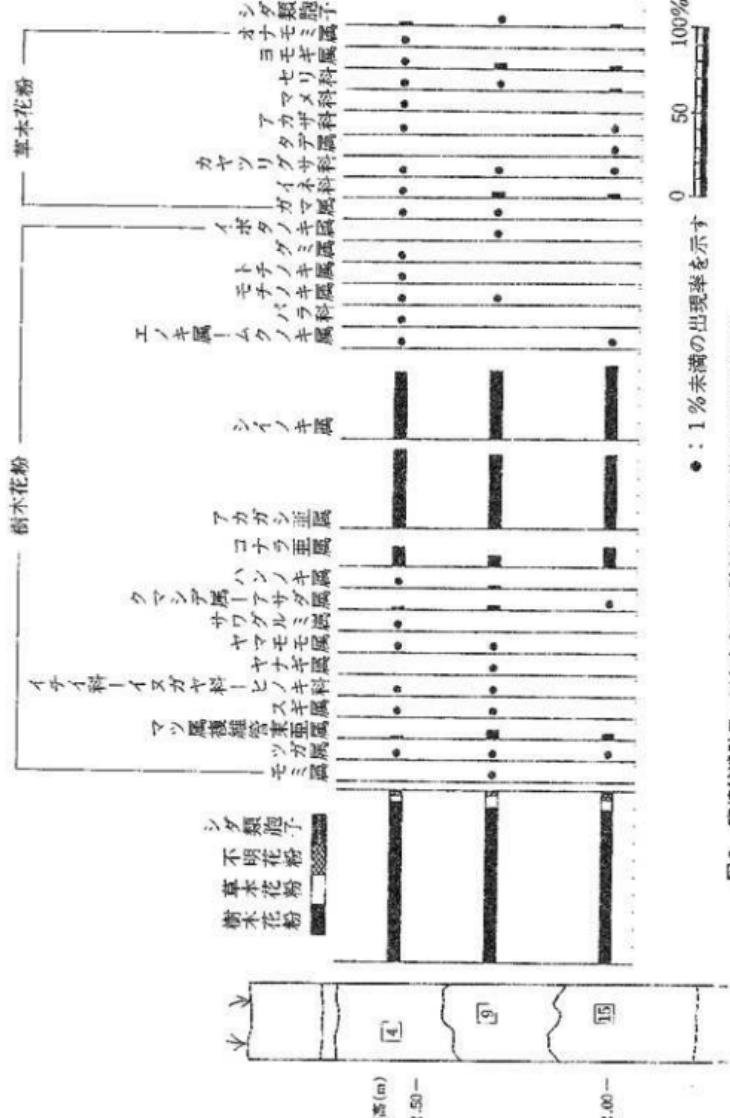


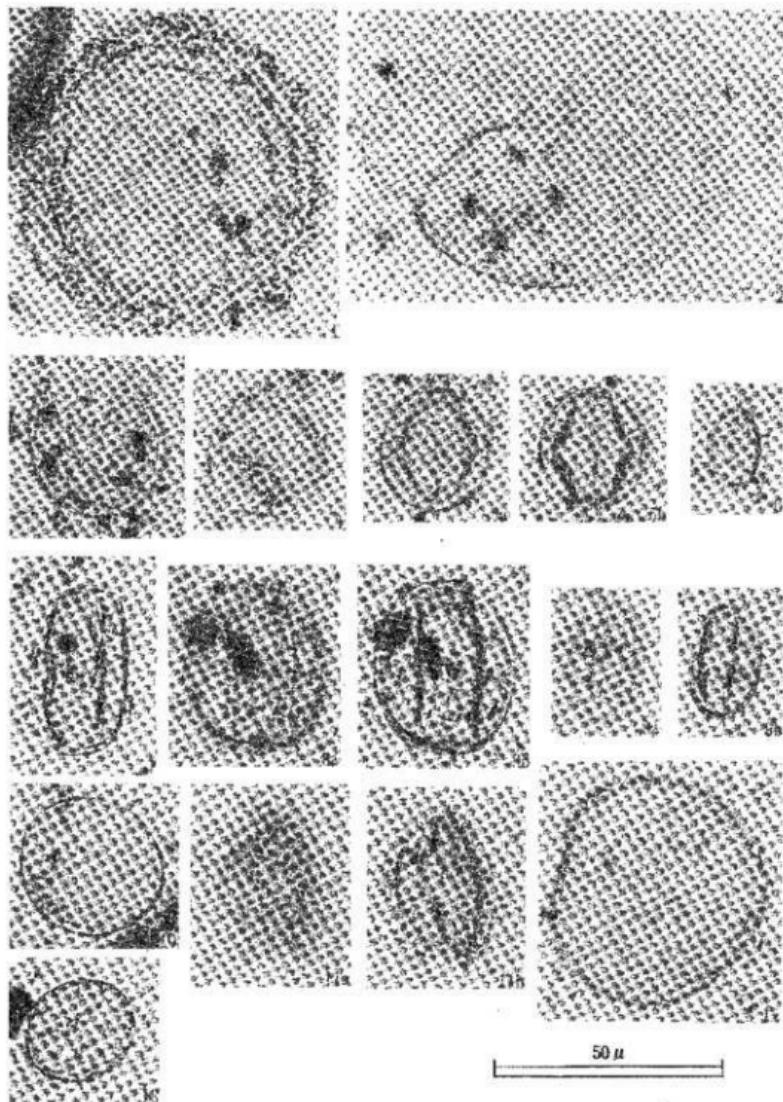
図3 宮崎鉱業株式会社セイショントリアルにおける花粉化石群集の変遷  
出発原料は、樹木花粉は樹木花粉標本、草木花粉・シダ類胞子は不明花粉を除いた  
花粉数・胞子数をそれぞれ添数とした百分率で算出した。

### 図版説明

写真番号	花粉化石名	試料番号
1	ツガ属	9
2	マツ属	9
3	スギ属	4
4	ヤマモモ属	4
5a・b	アカガシ亞属	15
6	シイノキ属	15
7	コナラ亞属	15
8a・b	コナラ亞属	4
9a・b	シイノキ属	4
10	エノキ属—ムクノキ属	15
11a・b	モチノキ属	9
12	イネ科	9
13	アカザ科	15



図版 2





# 文化振興課

諫早市文化財調査報告書第9集

宮崎館遺跡等範囲確認調査概報

昭和63年3月31日

発行所 謹早市教育委員会  
諫早市東小路町1番地

印刷所 真光社印刷  
諫早市八天町

